01

立残山（たてのこしやま）

西三川砂金山の採掘地のひとつで、現在も人力によって掘り崩された急斜面を望むことができる。山裾には立残山堤から続く水路跡があり、掘り崩した土石に大量の水をかけて余分な土砂を洗い流し、比重の重い砂金を水路の底に溜める「大流し」という作業が行われた。このような新技術が戦国時代末期頃から導入されたことにより、産金量は飛躍的に増大した。

02

大山祇神社（おおやまずみじんじゃ）

文禄2（1593）年、砂金山の繁栄と安全を祈願して建てられた神社。相川の大山祇神社は、この神社を勧請したものといわれる。能舞台は、19世紀後半の建築と推定され、昭和20年代まで能が演じられていた。鳥居や狛犬などの石造物は、明治時代に笹川から北海道への移住者が寄進したものである。4月15日の例祭日には、大獅子を出す。

03

金子勘三郎家（かねこかんざぶろうけ）

江戸時代後期から明治5（1872）年の閉山まで砂金山の名主を務めた。主屋と土蔵は江戸時代後期の建物である。一方、納屋・牛納屋・便所は明治時代初期の建物であり、砂金山閉山後に、鉱業から農業へと生業が転換した様子を今に伝えている。

（修理工事中のため、敷地内への立ち入りはご遠慮願います）

04

金山役所跡・金山役宅跡（きんざんやくしょあと・きんざんやくたくあと）

江戸時代、西三川砂金山には金山役所が置かれ、佐渡奉行所から2名の役人が派遣された。採取された砂金は、月末毎に役所に集められて計量され、奉行所へ納める分と、金掘りたちの取り分が決められた。役所跡と役宅（役人の住宅）跡は、現在も江戸時代の絵図と同一の場所にあり、石垣で囲まれた平坦面が役宅跡、道路を挟んで向い側の畑地が役所跡である。

05

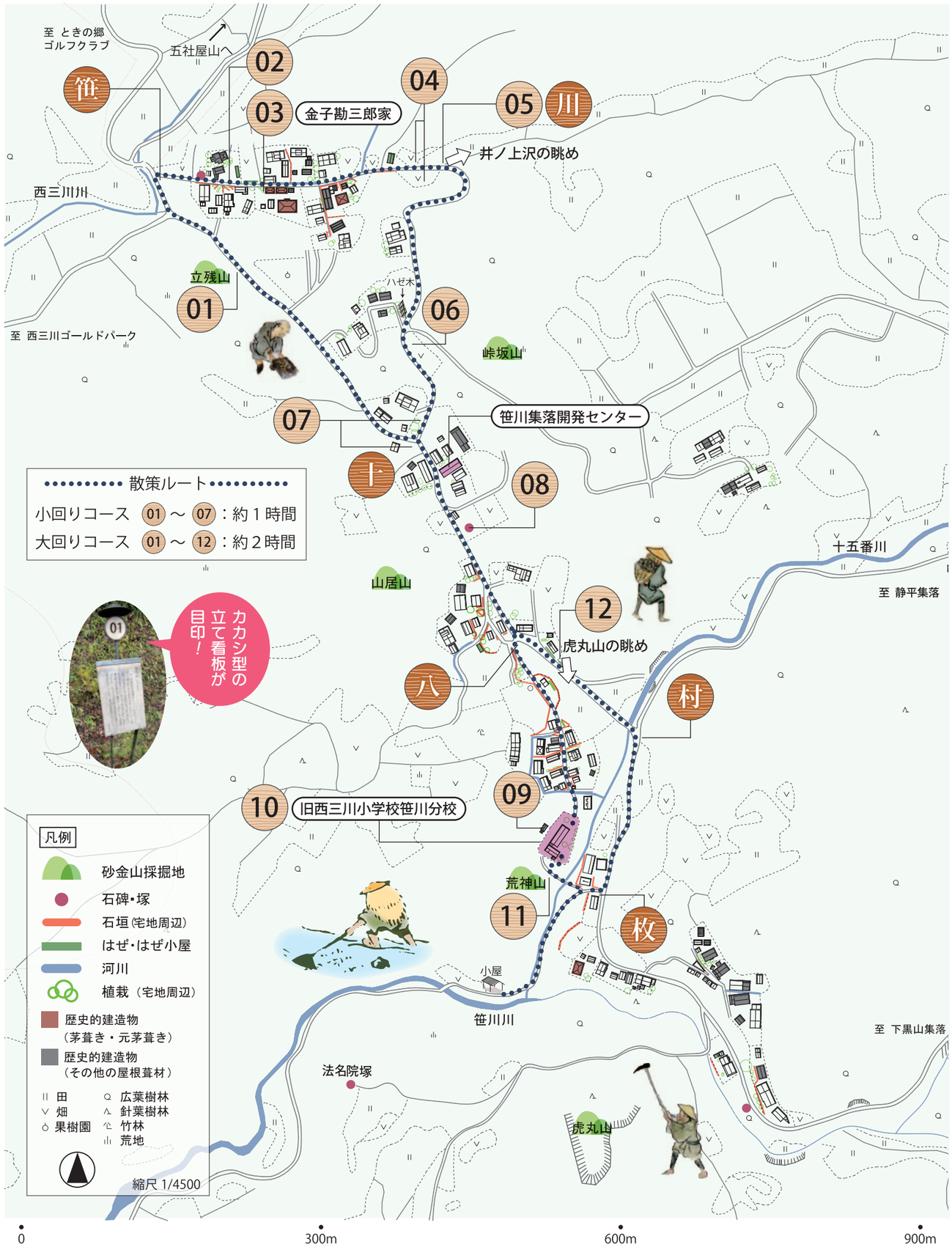
井ノ上沢（いのかみさわ）

この付近には、かつて諏訪神社があり、その社領田の場所が井ノ上沢といわれている。弘治年間（1555～58）、松浪遊仁という人物によって砂金採掘にともない掘り潰されたという伝承があり、寛文年間（1661～73）に諏訪神社は隣の小立村に移転した。現在、水田は復興され、笹川集落の住民によって耕作されている。

06

立残山堤跡（たてのこしやまつつみあと）

江戸時代、西三川砂金山では、大流しに用いる大量の水を溜めるための堤が各所に設けられた。この堤の水源は、約1キロメートル離れた場所にあり、江戸時代の絵図によると、途中トンネルを掘って水を引いていたことがわかる。閉山後、周辺の農地の溜池に転用されたが、現在は埋め立てられている。



07

石積み水路跡（いしづみすいろあと）

西三川砂金山では、堤に溜めた水を採掘地へ送るために、砂金採掘で出た余分な石を利用して石積みの水路が作られた。この水路跡は、立残山堤から山居山採掘地へ向かうもので、一部は道路によって寸断されているものの、石積みの上面に平らな石を並べ、底面に水漏れ防止の粘土を貼って水を流した痕跡をみることができる。

08

旧金山・笹川集落境の石碑（きゅうきんざん・ささがわしゅうらくざかいせきひ）

笹川集落は、戦国時代末期に、一ヵ月に砂金十八枚（約2.9キログラム）を上杉氏に納めたことから、「笹川十八枚村」と呼ばれるようになった。それ以前は、小立村地内である北部の「金山」と、西三川村地内である南部の「笹川」の2つの村に分かれており、現集落センター付近に立つ道祖神の石塔が、かつての村境の名残をとどめている。

09

阿弥陀堂（あみだどう）

江戸時代の絵図に描かれている建物で、内部の須弥壇には中世的な要素を持つ渦巻き紋様が彫られている。須弥壇内には、江戸時代前期の作と推測される阿弥陀如来像が安置されていることから、ほぼ同時期の建立と推測される。この付近には、中世に遡る山伏の修行場などもあり、かつての砂金採取に関わった人々の信仰の名残をとどめている。

10

旧西三川小学校笹川分校（きゅうにしみかわしょうがっこうささがわぶんこう）

明治13（1880）年の創立で、現在の校舎は、昭和37（1962）年に建てられたものである。昭和33年のピーク時には35名の児童が在籍したが、平成21（2009）年には4名となり、平成22年3月、129年の歴史に幕を閉じた。しかし閉校後も、笹川集落の住民によって、毎年7月に運動会、11月に収穫祭が開催されている。

11

荒神山（あらかみやま）

山伏が修行したと伝えられる岩山。江戸時代の絵図には、「この山に入ると祟りがあるとして、住民は大いに恐れた」という記述があり、近くには山伏が修行した滝跡もある。砂金山の発見・開発には、野山に分け入り修行する山伏が深く関わったとされており、笹川集落一帯には、その痕跡を示す信仰の場が数多く残されている。

12

虎丸山（とらまるやま）

西三川砂金山最大の稼ぎ場で、江戸時代の絵図には、山の上下二ヵ所で砂金採掘を行っていた様子が描かれている。虎丸山に至る大流し用の水路跡は約3.9キロメートルで、西三川砂金山の水路の中では二番目の長さである。現在も掘り崩されて露出した赤い山肌が見られ、かつて砂金山で栄えた笹川集落のシンボル的存在となっている。

笹 川 十 八 枚 村 →分岐路には誘導サインが設置されています